

そうだ、学校って—新型コロナウイルス禍で考える—

新型コロナウイルスが世界中に蔓延し未曾有の事態になっている。地球全体を一気に呑み込んで広がるウイルスの脅威。2020年、人類はこの危機を乗り越えるために何をなすべきか。

学校休校の措置が取られた。京都府・市の児童、生徒たちは3月から5月6日まで（4月現在。さらなる延長も視野に入れておかねばならない）約2ヶ月の自宅待機を余儀なくされている。普段なら休日を待ちわびている子どもたちも、ここに至ってうんざりしている。

休校になるということはどういうことか。

第一は友だちと会えないということ。友だちとしゃべりたい、楽しく遊びたい、友だちとの関係性が断ち切られる、子どもにはこれが一番こたえる。友だちと会いたいなと自宅でうずうずしている子どもの様子をみているとよく分かる。そうだ、学校は友だちがいるところなのだ。

第二は勉強がつまらなくなる。自宅で

課題学習プリントを一人でやってもつまらない。先生や友だちと顔を合わせないでPC通信学習で元気なんか出る？そうだ、学校は先生と友だちと一緒に学ぶところなのだ。

第三は今まで先生の指示で動いていたけれど、そうだ、自分の頭で考えて何をするか決めて行動するのだ。

第四は給食がないこと。昼食はどうしているのだろう。共働き家庭は子どもで留守番。弁当を作ってもらって食べている？自分でカレーを作る？菓子パン？栄養は十分か？一人では美味くない、みんなといっしょに食べる給食がいいな、体重が減っていないか？そうだ、給食は文化だ、健康と体力の源だったのだ。

第五は子どもが学校へ行くから親は安心して仕事も出来た。そうだ、学校は安心安全な所なのだ。

第六は学校に子どもの姿が見えないこと。公園にもいない。町から子どもの姿と声が消えた。なんと寂しい光景。そうだ、子どもは周りを元

気にさせていたのだ。

○
かつて阪神淡路大震災のときに、また東北大震災のときに教師たちは大事なことに初めて気付いた。

学校に子どもが来るということ、それがどんなにかけがえのない価値あることか。—よくぞ生きていた、よくぞ学校へ来てくれた。

教師たちは語り合った。—今まで私たち、学校はこの子どもたちを心から宝のように大切に育ててきたか。

学校とは何か。改めて考え問い直すときである。

（京都教育センター・季刊誌「ひろば」2020号 編集後記より 編集長 西條昭男）

